



親御さんが来られるのでおよそ倍、2千人を収容できないと無理なものですから。

松原 若い人が4千人、一気に増えるわけですから、活気も生まれるでしょうし、街の印象も変わるでしょうね。

伊藤 ええ、その効果は市にも大学にも大きいと思います。これまでの瀬戸キャンパスには、06年に新設した人間健康学部が残ります。人間健康学部は、健康や福祉の専門家を育てることを目的とした学部で、人間健康学科とリハビリテーション学科の2学科からなります。健康をうたっていることもあり、瀬戸が適切な環境と思います。

実学環境と人材を求めて都心へ回帰

― 郊外から都心へ移転する理由や目的はなんでしょう。

松原武久

名古屋市長

対談

伊藤信義

名古屋学院大学理事長

大学と都市の新しい関係

― 都心回帰で始まる名古屋学院大学の挑戦 ―

“都市と大学の関係をもう一度見つめ直してみよう”。

くしくも、旧来のつきあいがある関係で実現した名古屋学院大学理事長と名古屋市長の対談。都心に戻ることにした名古屋学院大学と都市活性化を模索する自治体それぞれのトップが考える大学と街のかかわり方、学生と市民とのコミュニケーション、知的財産としての大学の活用などを、忌憚なく話し合った。大学と都市の発展的関係を探る。

伊藤 大きなものとして3つあげられます。全国どこも同じでしょうが、一番大きいのは少子化問題です。子どもの数が減り、07年には大学全入時代に入ります。一方、大学は国公立私立も含めて、学部学科が増えています。個性や特長を出して魅力ある大学にしたいか、いと、生き残れないわけです。大学側はただ学生が入ってくるのを待っているわけにはいけません。特に地方の私立大学は深刻です。

松原 やはり名古屋市内、とくに熱田あたりだと利便性も良く、学生に対するセールスポイントとしても有利でしょう。瀬戸のキャンパスは、環境は抜群でしょうが、名古屋市内から電車・バスで1時間以上かかるとなると、ちよつと若い人は考えてしまうでしょうね。

伊藤 2つめの理由はそこなのです。今は勉強だけの時代ではありません。大学生は、アルバイトも遊びもしたいし、今は教室の中の勉強だけでは実社会で通用しない。つまり、実学といっています。目で見て体験することも含めて勉強だと。それにはできるだけ変化に富んだ環境が望ましいと考えています。都心のキャンパスなら、その点にアドバンテージがあります。

3つめは、名古屋学院大学がもつと飛躍しなくてはいけないということです。やはり改革には新しい人材や行動が必要ですし、そのためには環境も重要になってきます。結局、良い人材が良い大学をつくるわけです。

松原 かつて都心から郊外へ郊外へと大学が移つていった時代背景には、将来人口が増え続けるだろうという予測があったわけです。学生が増えれば、体育実習の場所や、キャンパスや研究施設に広い場所が必要です。その結果、大学を都会から追い出すような形になっていった。しかし、先ほどの少子化問題のように、子どもや若い人が減り始めた。その若者たちがさらに都会

からいなくなるとうなるか。そういうデメリットはあるわけです。

伊藤 そうですね。若者が増えるだけで、街は変わります。お店やいろいろな施設などの環境や雰囲気が変わるし、活気が出ます。大切なのは街と学生が良い形で共存していくことです。

松原 京都などがそうですね。街の人が学生を大切にできる風が昔からある。郊外型の大学だとなかなか街の人と触れあう機会も少ないんじゃないかな。現にキャンパス移転が決まっています。みんな手ぐすね引いて待っていますよ(笑)。

伊藤 大学ももう郊外で孤立してはやっていけない時代です。一般社会に入っていく、社会や地域に必要な存在でなければいけないのです。(以下略)

